

アメリカをまなざす娘たち：
水村美苗、石内都、山田詠美の初期作品における
越境と言葉の獲得

要旨

平成 30 年 1 月

城西国際大学大学院 人文科学研究科

比較文化専攻

但馬 みほ

本博士論文では、日米間の越境体験を創作の契機とした三人の日本女性作家による小説および写真集を分析対象とし、それぞれのテキスト上に看取される言語と人種、ジェンダーの相互作用に注目して考察を進める。各々の日本女性が越境体験を経ていかなるテキストを産出したか、その表現形のダイナミズムをジェンダー批評ならびにポストコロニアル文学批評の方法論に依拠しつつ考察する。

主たる分析対象テキストは、水村美苗『私小説 from left to right』(小説、1995年発表)、石内都『絶唱、横須賀ストーリー』(写真集、1979年発表、撮影期間1976年～1977年)、『YOKOSUKA AGAIN 1980-1990』(写真集、1998年発表、撮影期間1980年～1990年)、『CLUB & COURTS YOKOSUKA YOKOHAMA』(写真集2007年発表、撮影期間1988年～1990年)、山田詠美『ベッドタイムアイズ』(小説、1985年発表)である。

対象を日米関係に限定する理由は、近代以降国家としての日本が日々最も強く影響を受けてきた相手がアメリカだということが挙げられる。太平洋を国と国とを結ぶ回路とみなせば、日本とアメリカは隣国同士の関係にある。幕末の開国以来、日米関係には常に武力が介在し、現在に至るまでアメリカは日本に対して政治、経済、学術、文化等々の面で他国を圧する影響力を行使している。加えて日本とアメリカの関係において重要な契機となったのが太平洋戦争である。表面的には男性性を顕著に誇示するとも見られるアメリカと対峙したときに、日本人、ことに女性はどのような言葉で遭遇の体験を表現するだろうか。

戦後生まれで高度経済成長期に思春期を迎えた上記三人の女性作家たちは、一見なんのためらいもなくアメリカとの関係を取り結んでいるように思われる。だが、彼女らとアメリカとの間には、常にすでに敗戦国民としての〈母〉の記憶が介入する日本語という言葉が存在する。彼女らがアメリカと一対一で対峙するとき、〈母〉の言語はどのような幻影もしくは葛藤を提供し、それとどう折り合いをつけて作品が創出されたのか。〈母〉の言語という壁を乗り越え、あるいはそれに守られて、作品が編まれた軌跡を本研究で検証する。

第一章では水村美苗の自伝的小説『私小説 from left to right』を取り上げ、テキストにおける主人公兼語り手である美苗の主体性のありかたに着目し、書記言語としての日本語の視覚表象が美苗の主体性構築にいかに関与するかを論じる。美苗の日本語の書記言語偏愛は、美苗の人種的劣等感と表裏をなしている。〈母語〉である日本語と学習言語である英語との間の力学的非対称性に激しい葛藤を覚えつつ、語りの言葉を模索する主人公の主体性構築の過程を、越境にともない変化する母娘の関係を交えて検証する。

日本の文芸作品としては珍しく横書きで書かれた『私小説 from left to right』は、日本語・英語・若干のフランス語を混交した特異な文体が反響を呼んだ。このことに関しては様々な研究が発表されているが、語り手の抱く人種的劣等感を日本語の文字表記ならびに

日本語の〈女ことば〉に結びつけて論じる研究は発表されていない。また『私小説 from left to right』の母娘関係の変容を、〈アメリカ〉の作用を基軸として論じた研究も管見では見当たらない。本研究は、主人公が多用する「屈辱」という語をキーワードとしてその内実に迫り、近代以降の日米関係と日本語・英語の力学的非対称性を、母娘関係と人種の観点から考察する。

第二章では写真家石内都の初期作品を分析する。石内の作品を水村美苗、山田詠美らの文学作品と同じ俎上に載せて分析することは従来にない試みと考える。客体を常に必要とする写真という視覚芸術において、石内が対象の〈身体〉をどのように表現しているかを検証する本研究では、石内の初期作品に顕著な性的身体の欠如から、その後一気に身体を前景化した作品へと転向する契機に、横須賀における〈アメリカ〉の存在があることを論証する。日本の内部にありながらアメリカとの〈国境〉を有する特殊なトポスである神奈川県横須賀市を舞台とした石内都のデビュー写真集『絶唱、横須賀ストーリー』と『YOKOSUKA AGAIN 1980-1990』、『CLUB & COURTS YOKOSUKA YOKOHAMA』を分析対象の中心に据えることで、軍事基地の存在が横須賀に強いる過剰な身体性と、その反動としての石内作品における身体性操作のありかたを解き明かしていく。写真行為を通じて「横須賀」と「母」から受けた「傷」と向き合い、選択の余地なく付与された自分のなかの「女性性」と深く切り結ぼうとする石内の側面に光を当てることで、本論は「横須賀」と「母」を結ぶ一本の線上にアメリカが存在することを指摘し、両者から受けた「傷」を写真行為で定着させることによって、石内がいかに傷を克服し、自ら〈女性〉として生まれ変わっていくかというプロセスを、日本の敗戦と関連づけて考察する。石内の「個人的な」記憶を織りあげた「横須賀」シリーズが、「母」という結節点を得て、現在まで続く「ひろしま」シリーズの普遍性につながるころに、〈敗者〉が〈敗者〉のまま生きのびる可能性を見出そうとする試みを本論で展開する。

第三章では、山田詠美のデビュー作『ベッドタイムアイズ』における主人公兼語り手キムの母親探しと母との決別、その結果としての言葉の獲得過程を検証し、キムの言葉を通して明らかになる日本人の〈劣等感〉の本質について考察する。

『ベッドタイムアイズ』は過激な性愛表現が頻出し、発表当初からその面に特化して注目を集めることが多かった。本章の前半では従来の視点とは異なり、キムの恋人である元アメリカ海軍横須賀基地所属の黒人兵スプーンをキムの〈母〉なる存在と同定し、キムが〈母〉としてのスプーンとの出会いを契機に、主体性構築のための言葉を得るという見解を提示する。章の前半では主としてフロイト・ラカンの批評理論を援用するが、それは肉体的に注目が集まりがちな『ベッドタイムアイズ』のテキストに、じつは強い論理指向が働いていることを論証するためである。

章の後半では、前半で明らかになった問題を掘り下げ、『ベッドタイムアイズ』の〈政

治性>を検証する。『ベッドタイムアイズ』はラブストーリーの体裁を取ってはいるものの、実際にはアメリカに向けた日本の側からの一方的な偏愛がテキストに色濃く示されている。テキストが発する人種観を、ジェームズ・ボールドウィンの『もう一つの国』と日本の少女漫画の影響を考慮しながら読み解き、近代以降の日本人の心性と日本語の特性、そして日本の敗戦というファクターによって考察するという新しい論を展開する。

日本女性がアメリカという触媒と出会った際に、どのような反応を示し、それがテキスト上にどう表出されるかを、母娘関係を基軸に考察したが、終章ではそれぞれのテキストを章の枠を超えて結びあわせ、そこから浮上するであろう言説を捉えた。

本論文で検証したテキストでは共通して、劣等感、屈辱、恥などのきわめて感情的な語が用いられている。それらが揃って提示するのは、日本人の人種的劣等感と敗戦という事実の重大さと思われる。アメリカとの戦争を体験した<母>たちと、戦争の影を感じて育った<娘>たちが、対戦国アメリカにどのようなまなざしを向けたかをあらためて考えることで、本研究の結びとして、日本が今後国際社会で生き延びていくために有効なアプローチを、石内都の作品創出の方法から探っていく。